

中央高地を介した弥生後期の交流

—「箱清水式」大地域型式圏を中心として—

佐久考古学会

小山 岳夫

はじめに

2019.2.9 に開催された合同シンポジウムに私は発表できただけでなく、誌上発表も広域的な視野に欠ける局所的な内容であったことを反省している。そこでここでは、視野を広げて「箱清水式」土器大地域型式圏⁽¹⁾を中心とする財のあり方の実態を概観し、本企画の趣旨に添いたいと思う。

1 後期前葉の趨勢

(1) イネ・アワ・キビの複合栽培を新天地へー南へー

中央高地「箱清水式」分布圏の弥生後期前葉は、中期「栗林式」土器分布圏の急速なしぼみからの復活が始まっているものの、押しなべて集落規模が小さく、数も少ない。

後期前葉の「箱清水式」大地域型式圏内で起きた土器を中心とする移動は、「栗林式」「宮の台式」など撤退後の空白となった新天地の開拓が主眼で、鉄などの金属やガラス玉などの財を伴う移動ではないと見ている。

長野盆地からは鳥居峠・吾妻川流域を介して渋川・沼田地域への群馬県北部への進出があったと考えられ、私はこの動きが「樽式」土器の発生の一つの要因と考えている。これらはさらに南下して埼玉県比企丘陵を中心とした地域に「岩鼻式」、東京都・神奈川県東京湾西岸内陸部に「朝光寺原式」土器を生じせしめたと考えている。なお、「朝光寺原式」は中期後葉から鉄素材・鉄製品を積極的に受容した南関東に存するためか、「箱清水式」大地

域型式圏の中ではいち早く鉄剣・鉄釧・ガラス小玉が存在している。

いっぽう、佐久盆地からは、シンポジウム発表要旨でもふれたように佐久甲州街道を介して山梨県甲府盆地、大門峠を介して諏訪盆地茅野地域への「岩村田式」と称する土器型式の移動が認められた。また、甲府盆地に根を下して生じた「金の尾式」土器は太平洋沿岸の駿河、相模の2つの地域への進出を果たしていた。

土器型式だけでなく佐久盆地固有の土器敷炉や長方形を呈する竪穴住居の平面形態、不整円形を呈する周溝墓など生活習俗の諸要素も甲府盆地、茅野市域に持ち込まれていたことを明らかになり、弥生時代後期において佐久盆地から甲府盆地、茅野市域への集団移住があった可能性が高まった。

列島中央部東側長野盆地から群馬・埼玉比企丘陵・東京湾西岸内陸部への土器の流れ、西側佐久盆地から甲府盆地・駿河・相模の太平洋沿岸部への土器の流れはいずれも南方向を指しており、新潟県など北方向への中部高地型櫛描文土器の移動は少ない。冷涼な気候を回避したかのような状況である。

これらの現象を駿河・相模を除き、私は中央高地の「箱清水式」土器中様式圏で育まれた冷害に耐える米(イネ)と雑穀(アワ・キビ)の複合栽培⁽²⁾の新天地への導入が目的の移動、すなわち集団移住であったと解釈している。

ここまでが2018年10月7・8日に開催された西相模考古学研究会・兵庫県考古学談話会合同シンポジウムの予稿集で発表した概要である。

(2) 中央高地における鉄製品・ガラス小玉など財の不在

先行論文で杉山和徳が集成した長野県出土の鉄製品⁽⁴⁾を検証した結果、後期前葉の鉄製品は皆無であることを指摘した⁽⁵⁾。

本稿ではこれまで未検証であったもう一つの財、斎藤あやが集成と分析に取り組んだ⁽⁶⁾ガラス小玉の検証を行った。

長野県におけるガラス小玉の出現期については、斎藤が玉類段階Ⅰ＝後期前葉以前の可能性があるとした中野市西条・岩船遺跡12・16・17号土壙⁽⁷⁾、長野市本村東沖3号木棺墓⁽⁸⁾、千曲市湯ノ崎遺跡1号土坑⁽⁹⁾、佐久市五里田1号土器棺⁽¹⁰⁾、同市後家山遺跡1号木棺墓⁽¹¹⁾を検証した結果いずれも時期

決定に足る共伴土器が乏しいことがわかった。

西条・岩船遺跡は後期前葉の集落とともに中葉以降の集落もあるため、ガラス小玉が出土した土壌を前葉と断定することはできない。また、本村東沖遺跡には後期前葉の遺構・遺物はなく、後期中葉以降の集落が確認されているためこれに付随する墓址である可能性が高い。湯ノ崎の土坑は5世紀以前と位置付けられているが、近くに古墳時代初頭の堅穴住居址があり、これに近い時期の可能性が高い。五里田の土器棺は後期中葉の土器である。後家山は後期中葉の集落であり、前葉に遡る集落はない。木棺墓は中葉の集落に付随する可能性が高い。茅野市家下遺跡の2号土器棺墓は無花果形の無文壺のため位置づけが難しいが、小池岳史によれば後期後半の可能性が高いという。このほかの集成資料も共伴土器を中心に当たって見たが、いずれも玉類段階Ⅱ～Ⅲ、後期中葉から古墳時代前期前葉に位置づけられるものであった。斎藤は端面研磨の状況での編年を試行しているため、これが確立されればガラス小玉単体で時期判定が可能となり、後期前葉にさかのぼるガラス小玉が見いだされるかもしれない。研究の進展を期待したい。

今回のガラス小玉出土遺跡の検証により、長野県においては確実に後期前葉とできるガラス小玉はなく、鉄素材・製品も同様な状況であることを勘案すると、長野県の弥生後期前葉は鉄・ガラス小玉などの財の流通がはじまっていなかった可能性が高まった。これが正鵠を得ていれば、これまで推測されてきた財の流通経路は大幅な変更を余儀なくされる。

2 後期中葉以降の趨勢―財が南北から―

後期中葉以降になると集団移動的な人の動きよりも鉄を中心とする金属製品・素材やガラス玉など財の交易的な動きが活発になる。

(1) 北信濃から北群馬への北陸系土器の移動

長野県の北半部、長野⁽¹²⁾・上田⁽¹³⁾・松本⁽¹⁴⁾盆地では後期中葉以降、北陸系土器の搬入が顕著になる。

田嶋明人⁽¹⁵⁾によれば、青木一男の長野盆地弥生後期編年3段階（以下「青

木3段階」という。) ⁽¹⁶⁾＝後期中葉から定量の北陸系土器がみられ、越後からの波及が主体である。そして4段階になると長野盆地から能登や東山陰にまで及ぶ広域の移動を示唆する北陸系土器が出土している。特に越後には、丹後の直接的影響が考えられる有段擬凹線文甕が存在しており、それが長野県北部にまで及んでいる可能性も否定できない。

図1は長野市長野女子高校遺跡2号土坑から出土した青木3段階の箱清水式土器と北陸系土器である。福島孝行は有段擬凹線文甕の胎土は京丹後地域の福田川流域から産出される高温石英を含んでいるので、丹後半島からの搬入を疑うことも可能としている⁽¹⁷⁾。これが正しければ、長野盆地では田嶋の予想通り丹後の土器を受容していたことになり、搬入経路も京都→福井→石川→富山→新潟→長野の陸路ではなく、京都→新潟の海上ルートから中継地を経ずに長野県にもたらされた可能性が浮上する。

長野盆地に搬入された北陸系土器は、菅平を横目に通過し、鳥居峠を越えて渋川市、沼田市など群馬県北部にも搬入された。北陸系土器の共通性だけでなく、長野盆地と群馬県北部は在地の土器様相も近似する。

沼田市小沢Ⅱ遺跡では長野盆地からの搬入品とみられる甕が出土している(図2)。このほか、沼田市や中之条町の弥生後期遺跡からは通常「樽式」の壺の頸部には装飾されないT字文が多用されている⁽¹⁸⁾ので、これらの地域に限っては交易だけでなく人の移動を想定してよい。

佐久盆地は「箱清水式」中地域型式圏にありながら北陸系土器が不在である。後期中葉以降には前葉にみられた山梨方面への人口流出は途絶え、大木紳一郎が唱える「富岡型樽式」土器⁽¹⁹⁾との隣接地域間交流が主流となる。

(2) 鉄剣の分布

刃関双孔鉄剣は、杉山和徳の集成⁽²⁰⁾では55遺跡87例確認され、九州では北部を中心に24遺跡34例と濃密な分布が認められる。このため、杉山は九州で生産され、各地に流通した可能性を説く。ほとんどが後期のものであるが、福岡県吉武遺跡群、神奈川県砂田台遺跡など中期にさかのぼる双孔鉄剣もあり、多くは墓の副葬品として使用された。

荒田敬介によれば後期前半には鳥取北東部から京都北部にかけての日本海岸は鉄剣と鉄刀が副葬品となる⁽²¹⁾。双孔鉄剣は鳥取では副葬品に選択されず空白地帯だが、朝鮮半島からの物流拠点の一つと目される丹後地域では2遺跡14例と北部九州に次いで多くの双孔鉄剣がみられる。朝鮮半島に刃関双孔鉄剣があることから、製作地を半島に求めることも可能である。

日本海沿いを東へ進むと福井・石川・新潟⁽²²⁾の北陸諸県では各1例にとどまり、長野県に至ると5遺跡7例、群馬県は3遺跡5例と出土数を増やす。

関東平野では埼玉県・東京都で各2遺跡2例、千葉県で1遺跡2例、神奈川県で中期の砂田台を除き後期遺跡に限定すると3遺跡3例と低調である。静岡県では西部に2遺跡3例、岐阜県では1遺跡1例と少なく、愛知・三重県をはじめ和歌山・滋賀県は双孔鉄剣の空白地帯である。

東日本において丹後地域から全くの飛び地である長野県から多くの刃関双孔鉄剣が出土している事実がある。

（３）螺旋状鉄釧の分布

長野・群馬・埼玉県と太平洋沿岸にしか分布しない螺旋状鉄釧の出土例は、2014年土屋了介のカウントでは36遺跡60例に上る。総合的な研究は1990年代から始まっているが、本稿では資料が出揃い、分布域がおおむねつかめて型式分類によって地域色が明示された近年の土屋了介⁽²³⁾、平林大樹⁽²⁴⁾の研究を参考にして考察を行う。

土屋了介の螺旋状鉄釧分類は帯金幅4mm前後と8mm前後で大分類、8mmの鉄釧をさらに巻き上げの段数の多寡で二分する。一方、平林大樹は土屋の段数による分類を省略し、帯金幅6mm前後（A類）と8mm前後（B類）で大別する。細部は違うが、両者共に帯金幅の広狭を主眼に置いた分類で、両者作成の分布図は長野盆地・上田盆地・松本盆地などの長野県北部から渋川地域など群馬県北部に幅狭、太平洋沿岸に幅広の螺旋状鉄釧が集中するという螺旋状鉄釧が南北の両極に分かれて分布する傾向を見出した点で一致する。

土屋は幅広の螺旋状鉄釧を巻き上げの段数で分類し、佐久盆地から長野盆地から出土する段数の少ない螺旋状鉄釧について流通経路上にある集約点

となる太平洋地域から二次的に移動したものであった可能性を指摘する。平林はB類、幅広のものは関東から佐久地域へ流入した可能性を示唆するが分類基準の違いにより、B類が長野盆地にまで達したとは見ていない。いずれにしても太平洋沿岸に分布が集中する幅広の鉄釧が佐久盆地で主流を占める事実は、広域流通する財が「箱清水式」大地域型式圏の枠を超えた分布を示す実例として重要である。

（４）ガラス小玉の分布

玉類段階Ⅱに北近畿ではカリガラス淡青色小型のガラス小玉は姿を消すが、長野県北部と北群馬では依然淡青色のガラス小玉が主流である。この現象を斎藤はⅠ期の伝世品と理解する。伝世品がどこに存在していたのか不明だが、北條芳隆論文⁽²⁵⁾を参考にすると北近畿の丹後地域で廃った時代遅れの財を長野・群馬県北部の人々が押しつけられていた結果と観ると面白い。

玉類段階Ⅱになって南関東に分布の中心を置く紺色大型のガラス小玉は、長野県各地にも分布する。斎藤の集成から南信飯田市では36例、中信塩尻市では23例、東信佐久市では18例⁽²⁶⁾、北信長野市で27例の紺色大型を抽出できた。斎藤は紺色大型が東海地方静岡県に多いことから南信→中信→北信→東信の流通経路を想定した。群馬県では渋川市有馬では14例と北で少なく、高崎市新保田中村前が27例と南に多い。村前例は樽2期＝小山Ⅲ期古＝後期中葉古段階であり、佐久市周防畑B2号周溝墓から長野県では一歩先んじて導入された紺色大型のガラス小玉7例も同時期である。土器の交流の実態も踏まえて財が群馬経由で齎された可能性も考えなければならない。

山梨県では朝気遺跡に4例、頭無A遺跡の破損品が4例あり、太平洋エリアと様相が近似する。山梨県と隣接し後期土器様相も近似する諏訪湖南部の茅野市域では、現状紺色大型品は未発見だが、諏訪から中信あるいは東信という流通経路も想定しなければならない。

3 財流通の2極構造

（１）長野県北部から群馬県北部のまとめ

弥生時代後期中葉から後葉の長野・上田・松本盆地など長野県北部から渋川・沼田市など群馬県北部は丹後地域からの来歴が考えられる北陸系土器（田嶋の言う漆町２～４群）がみられる地域である。この地域の墓には刃関双孔鉄剣・螺旋状鉄釧・帯状銅釧・ガラス小玉が副葬され、螺旋状鉄釧、ガラス小玉の型的な特徴が際立つ。螺旋状鉄釧は４mm前後の幅狭品、ガラス小玉は丹後地域の伝世品とみられる淡青色小型品主体で、以南の関東一円との違いは明瞭である。刃関双孔鉄剣は北陸諸県や以南の関東よりも多く、九州以外では国内で最多数を保有する丹後地域との関連をうかがわせる。長野県北部から群馬県北部は丹後地域との直接的な財の流通も考えられる事象が積み重なりつつある。

（２）太平洋沿岸から長野県南部のまとめ

太平洋沿岸から長野県南部までの範囲は上記の長野・群馬県北部と同様墓に刃関双孔鉄剣・螺旋状鉄釧・銅釧・ガラス小玉が副葬される地域であるが、螺旋状鉄釧は８mm前後の幅広品、ガラス小玉は紺色大型が多いという違いがある。刃関双孔鉄剣は長野・群馬県北部よりも少なく、北陸系土器は弥生後期末～古墳初頭（漆町５群以降）になって千葉県に達するが、この段階では北からの財の流通は伴わなかったようだ。すなわち、後期中葉から後葉は北陸からの流れが到達せず、別ルートで導入された財の流通圏が形成された地域ととらえることができ、弥生後期中葉から後葉にかけて日本列島中部の南北に２か所の物流のまとめがあったことが想定されるのである。

長野・群馬北部と太平洋沿岸地域狭間にある佐久盆地は前葉における甲府盆地への人の移動が途絶し、中葉以降群馬県富岡地域との交流が主流になる。佐久盆地から出土する帯金が幅広い螺旋状鉄釧は、長野・群馬県北部とは近似性がなく、太平洋沿岸から出土するものに近い。佐久盆地の財については、太平洋沿岸から北上して齎されたものとみるべきである。

鉄銅製品・ガラス小玉など地域では生産できなかった財の流通は、土器の型式圏の枠組みを超えた。弥生社会解体の序章は後期に顕在化したのである。

註

- 1 小山岳夫 2019「検証 岩村田式土器」『専修考古学』16 号
- 2 遠藤英子 2015「IV蓋型土器残存圧痕のレプリカ法調査」『大豆田遺跡Ⅳ』215-218 頁
- 馬場伸一郎・遠藤英子 2017「弥生中期の栗林式土器分布圏における栽培植物」『資源環境と人類』第7号 1-22 頁 馬場・遠藤の研究により長野・佐久盆地と群馬県の栗林期はイネ・アワ・キビの複合栽培であったことがわかっている。同地域では後期の分析が少ないが、複合栽培は継続されていた可能性が高い。「岩鼻式」が存在する埼玉県和光市午王山遺跡でもイネと雑穀が相半ばする結果が出ている。
- 3 小山岳夫 2019「「南を目指した佐久の弥生人」から集団移住を考える」『弥生時代における東西交流の実態』西相模考古学研究会・兵庫県考古学談話会合同シンポジウム予稿集
- 4 杉山和徳 2014「東日本における鉄器の流通と社会の変革」『久ヶ原・弥生町期の現在』161 頁
- 5 小山岳夫 2018「「南を目指した佐久の弥生人」『山梨県考古学協会誌』第26号 84 頁 註17に記載
- 6 斎藤あや 2014a「関東地方における玉類の流通と画期」『久ヶ原・弥生町期の現在』129-140 頁
- 斎藤あや 2014b「関東地方における玉類の流通と画期（補遺）」『西相模考古23号 73-87 頁
- 斎藤あや 2015「玉類の流通と変化の画期、財との関係」『列島東部における弥生後期の変革』西相模考古学研究会
- 7 中島庄一 1996『西条・岩船遺跡群発掘調査概報』1997『西条・岩船遺跡群発掘調査報告書』中野市教育委員会
- 8 寺島孝典 1995『本村東沖遺跡Ⅱ』長野市教育委員会
- 9 佐藤信之 1998『湯ノ崎遺跡・一本松古墳』更埴市教育委員会
- 10 三石宗一 1999『五里田遺跡』佐久市教育委員会
- 11 富沢一明 2004『後家山遺跡 東久保遺跡 宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ』佐久市教育委員会
- 12 平林大樹 2014「Ⅳ-3 長野女子高校校庭遺跡出土の北陸系土器」『長野女子高校校庭遺跡』長野市教育委員会

- 13 尾見智志 1998『浦田 A・宮脇遺跡』上田市教育委員会
- 14 宇賀神誠司 1998 上木戸遺跡『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 2』一塩尻市その 1ー
- 15 田嶋明人 2009「古墳確立期土器の広域編年ー東日本を対象とした検討（その 3ー）」『石川県埋蔵文化財情報』第 22 号
- 16 青木一男 1999「長野盆地南部の後期土器編年」『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会
- 17 福島孝行 2018「長野盆地及び佐久盆地における鉄剣とガラス小玉ー丹後・但馬地域との関連からー」『弥生時代における東西交流の実態』
- 18 小山岳夫 2016「箱清水と樽」『長野県考古学会誌』152 号 T 字文は「箱清水式」固有の文様である。
- 19 大木紳一郎 2019「群馬県北部吾妻川流域の後期弥生遺跡について」『研究紀要 37』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 20 杉山和徳「東日本における鉄器の流通と社会の変革」『久ヶ原・弥生町期の現在』
- 21 荒田敬介 2019「鉄製武器からみた弥生時代における西日本の地域間交流」『弥生時代における東西交流の実態』
- 22 吉井雅勇 2013「C 金属製品について (2)鉄器」『山元遺跡』73 P 村上市教育委員会 吉井の新潟県の集成では、鉄剣は新潟県で 3 例いずれも墓からの出土している。刃関双孔は古津八幡山遺跡のみである。鉄剣では最北の村上市の山元出土例は双孔が確認できない。天王山式の土器棺墓内に副葬されていた。
- 23 土屋了介 2009「螺旋状鉄釧の基礎的研究」『日々の考古学』2 東海大学考古学研究室 2014「弥生時代における腕輪型製品の分布と流通」『西相模考古』23 号西相模考古学研究会
- 24 平林大樹 2019「鉄釧研究へのまなざし」『弥生時代における東西交流の実態』
- 25 北條芳隆 2014「鉄とガラス小玉の威力」『久ヶ原・弥生町期の現在』西相模考古学研究会
- 26 前掲註 6 『西相模考古 23 号』 斎藤の集成表 80 頁の 331 西一里塚の SM07（木棺）出土のガラス小玉は明らかに紺色大型なので 9 点を加えた。



図1 長野市長野女子高校校庭遺跡
2号土坑の土器

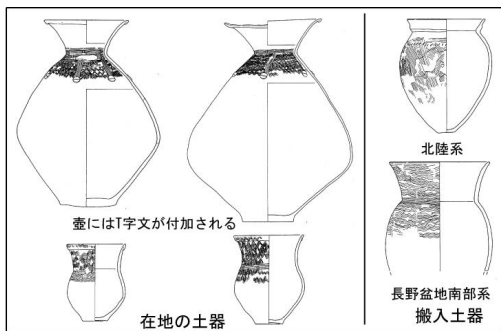


図2 沼田市町田小沢遺跡Ⅱ 1号住の土器

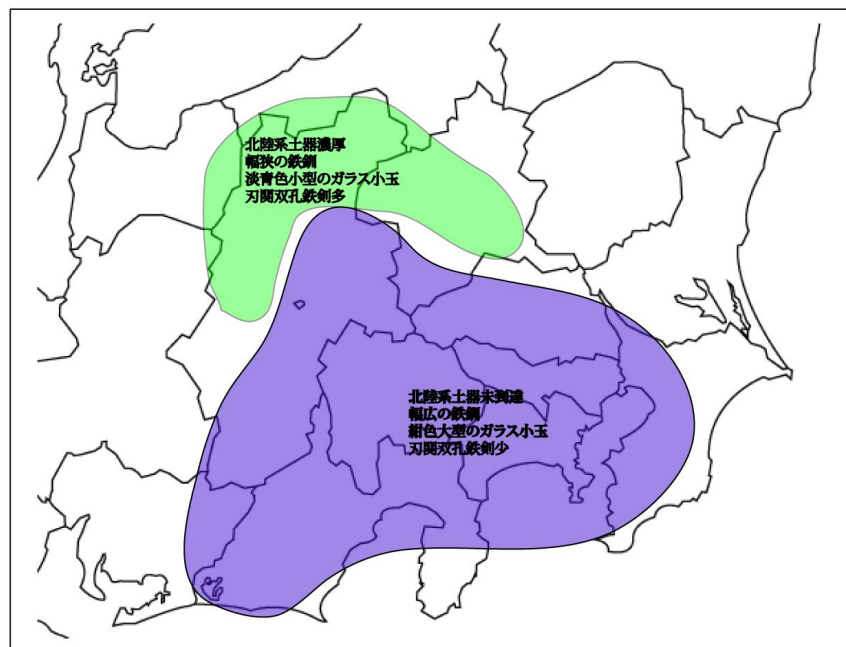


図3 弥生時代後期中葉～後葉における財の流通の二極構造